

安全安心・きれいな米づくりは健苗育成から！！

安全安心・きれいな米づくりを実践しよう！

事故防止のため苗箱配送時に過積載とならないよう注意してください

コシヒカリは、5月田植を実施しよう！

【種子更新】

- ・種子は全量種子検査を受けたものに更新する。
- ・種子の品質保証票は保管しておく。

【種子消毒】

薬剤名	濃度 (水200当たり)	浸漬時間
テクリードCフロアブル	200倍 (100ml)	24時間

※作業ポイントは右記を参考に！

【浸 種】 浸種の積算温度は120℃以上！

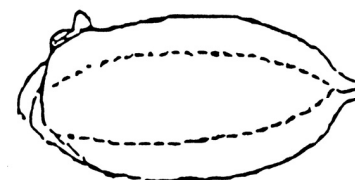
水 温	浸種日数	注意事項
10℃	12日間	①初日の水温を10～15℃の適温に保つ。 ②2日に1回は水を入れ替え、粃の上下を入れ替える。
15℃	8日間	③高温にしない(20℃以下)

※もち類は浸種の積算温度を100℃で終了させる。

【催 芽】

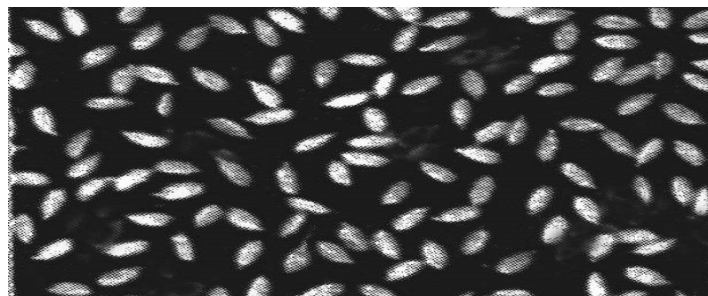
催芽適温	催芽程度	目安
30℃	1mm (ハト胸程度)	9割以上(発芽を揃える)

ハト胸程度
(播種に最適)



【播 種】 薄播きでガッチリ苗づくり！

1箱当たりの播種量	
乾粃重量	120g / 箱
催芽粃重量 (目安)	150g / 箱



120g／箱の播種状態

- ・播種時の灌水は1箱あたり800～1000mlとし、箱の底まで床土が湿った状態とする。
- ・青カビ、白カビ、苗立枯病の予防として、播種時(800ml)から緑化期(500ml)にダコレート水和剤500～1000倍液を灌注処理する。

【出 芽】 一斉に芽をそろえよう！

出芽の程度	出芽日数	温度管理
芽の長さが8～10mm程度	3～4日	30℃

水稻育苗ハウスを活用して野菜を栽培する場合は、育苗箱施薬剤を処理しない苗を用いて下さい。

春先の機械作業時は過信せず、安全確認を十分に！

苗の品種区別をしっかりと行いましょう！

【育苗管理】 ※緑化期の適温を外れた高温管理や灌水過剰管理は、病害や根張不足に繋がります。			
	温度管理	ハウス管理	水管理
緑化期	《日中》 20～25℃ 《夜間》 15～20℃ 〔夜間の温度を高くすること。〕	【ハウス搬入後 3～4日】 緑化終了の目安は、芽が地際から2.5cm程度伸長した時期とする。 ・遮光や保温のためラブリートや寒冷紗で被覆する。 ・ <u>夜間は被覆資材の二重掛け等により保温に努める。</u> ・高温にならないよう晴天時は換気に努める。 ・日中に換気のためハウスを開けた場合、 <u>夜温確保のため午後3時頃までに閉めること。</u> ・ <u>ゆめみづほは2日程度被覆期間を長くする。</u> 葉ヤケに注意（ハウスのビニールを新しくした場合は特に注意）	・緑化期間中の灌水は、 <u>覆土の持ち上がりがある場合と箱のスミが白く乾いた時だけとし、過湿に注意する。</u> ・灌水が必要な場合は晴天の早朝とし、低温時や夕方には行わない。
硬化前期	《日中》 20℃前後 《夜間》 10℃以上	【ハウス搬入後 5～9日】 ・高温にならないよう、ハウスの開閉はこまめに行う。 ・日中は、被覆資材は使用しないこと。 ・夜間及び低温時は被覆資材等で保温する。	・灌水は午前10時頃までに行う。 ・曇雨天時は土の乾き具合を見て判断すること。
硬化中期	《日中》 15～20℃ 《夜間》 10℃以上	【ハウス搬入後 10～15日】 ・温度管理は低めとし、徐々に外気温にならす。 ・霜等に注意し、低温時は被覆資材で保温する。	・灌水は朝方、ゆっくり時間をかけてムラにならないよう行う。（灌水ムラは生育ムラの原因になります。） ・ハウスの換気により、床土が乾きやすいので、晴天の日は朝昼2回の灌水が必要な場合があるので注意する。
硬化後期	外気温にならす	【田植え前 8～10日】 ・日中はハウスのビニールを大きくめくり、温度が上がすぎる時はハウスの腰部も開ける。 ・田植え4～5日前からは夜間も換気する。 ・霜に注意し、極端に冷え込む日は、日中早めにハウスを閉め、場合によっては被覆する。	・育苗期間が30日を超える場合や葉色が薄い場合には、田植え3日前に追肥を行う。 ※追肥の方法 液肥10号の200倍液（水10ℓに50ml）を1箱当たり500ml灌注し葉焼け防止のため軽く灌水する。

【カビ及び病害対策】

カビの種類	薬剤名	使用時期	処理方法
青カビ・白カビ	ナエファインフロアブル	播種時から緑化期	2,000倍液（水10ℓに5ml）を1箱当たり500ml灌注する。 総使用回数：2回以内
	ダコレート水和剤	播種時から緑化期 ※但し播種14日後まで	500倍液（水10ℓに20g）を1箱当たり500ml灌注する。 総使用回数：2回以内
赤カビ	タチガレエースM液剤	発芽後	500倍液（水10ℓに20ml）を1箱当たり500ml灌注する。 総使用回数：1回以内

※ムレ苗が発生したら、早急にタチガレエースM液剤を灌注し、葉からの蒸散を抑えるために寒冷紗で遮光する。

【プラスチック被覆殻の農地からの流出抑制対策】 ～環境対策～

近年、環境負荷軽減対策として、一発肥料に含まれる「プラスチック被覆殻」の河川への流出防止にむけた取組みが農業界に求められています。被覆殻の流出の“9割”は代かき時に発生しますので、「浅水代かき＋自然落水」と「被覆殻捕集ネットの活用」により、流出防止に努めましょう！

入水 → 2～4日程度 → 代かき → 4～6日程度 → 移植

代かきの数日前に、田面全体が隠れる程度に入水し、圃場に十分浸透させ、田面に土が7～9割ほど露出したら代かきを行う！

代かき、移植時の落水は極力行わないことで、肥料成分を含んだ水や土などの濁水の流出を防ぐことができる！

☆水田の排水口に捕集ネットを設置し、集まった被覆殻をすくい取り処分することでも流出軽減が図れる！